

古代詩歌と飛鳥京苑池

——万葉古代学として——

井 上 さやか

一 はじめに

奈良県立万葉文化館が建つ奈良県高市郡明日香村大字飛鳥の周辺には、七世紀初めに鞍作止利が制作したという仏像が今も鎮座する飛鳥寺があり、七世紀中に六十年以上に亘り歴代の王宮が営まれた飛鳥京跡や、七世紀後半～八世紀初めにかけての官営工房であった飛鳥池工房遺跡など、飛鳥時代の重要な遺跡が密集している。

なかでも、一九九九年に発見された飛鳥京苑池遺構では、中島を持つ不思議な形の池がみられ、大正五年（一九一六）に出土していた「出水酒船石」がその導水施設の一部であっ

たこと等が判明した。二〇一六年四月に同遺構の一部が整備され、奈良県立飛鳥京苑池休憩舎が開館したが、周辺には未発掘の地も残り、その全容は明らかになっていない。しかし、現時点での発掘調査成果だけを見ても、東アジアの庭園文化の中で特異な遺構であることは十分に窺うことができる。

古代の庭園と詩歌との関係については多くの先行研究があるが、本稿では、上記のような近年の考古学上のめざましい成果を踏まえつつ、飛鳥京苑池の実態と文学表現との間について考えてみたい。

二 「苑池」について

日本列島における庭園史については、考古学や造園学等の観点から整理が進んでいる。それを援用した文学や歴史学の研究も行われ始めて久しい。ただ、従来は飛鳥といえは明日香村島庄の嶋庄遺跡と草壁皇子の「嶋宮」とを取り上げ論じられることが多かった。¹しかし、万葉歌における嶋宮の描写と、現在確認されている島庄遺跡の池の遺構との間には大きな隔たりがある。同遺跡の池跡は方形をしており、万葉歌に詠まれた「勾の池」(巻二・一七〇)に相当するような曲池跡は確認されておらず、近くに曲線を持つ導水溝は検出されているものの、本体の方形池自体が遊宴等ではなく貯水用の池であるとも指摘されている。²文学表現が実態とかけ離れていることは往々にしてあるが、歌に詠まれた曲池の跡がいまだ発見されていないだけかもしれない。現時点で結論は出せない。

また、『日本書紀』『続日本紀』等の正史に「苑」「園」の語が散見し、『万葉集』にも「庭」「園」「嶋」「池」の語が詠

まれ、それぞれに指し示す概念の違いがあることは指摘されつつも、通用されている場合があることから同時に扱われ論じられてきた。³『説文解字』に「苑」は「所以養禽獸也」とあり、「園」は「所以有果樹也」とあって、本来両者は明確に区別されている。「嶋」については「海中往往有山可依止曰嶋」とあり、庭園において池中に造られる場合もあつたことから転じて庭園そのものを指すようにもなつたとみられている。飛鳥時代の「池」が必ずしも「嶋」を伴うわけではなく、「池」が必ず庭園施設であつたとはいえないことも指摘されている。⁴文献上では、後世に通用例はあるものの、王宮の施設に限って「苑」と呼んだ。⁵

日本庭園史のはじまりについても、文献上の初出に見出すか、遺跡の形状から導き出すかで見解が異なっている。祭祀を行う二八(庭)としての水辺の祭祀遺跡は、五世紀頃の城之越遺跡(三重県上野市)等が知られ、約三〇〇〇年前の縄文時代後期の矢瀬遺跡(群馬県みなかみ町)にすでに水辺の祭祀としての意匠が凝らされているとの指摘もある。⁶ただ、こつした水辺の祭祀遺構と東アジアに共通する「苑」とでは性格的に異なる部分もあり、相互に影響し合つて日本におけ

る庭園が形成されるとしても、區別して論じておく必要があると思われる。

さらに、飛鳥時代以降の古代庭園といつても一括りにはできないようである。小野健吉氏は、「飛鳥・奈良時代の庭園遺構と東院庭園」の中で次のように言及する。¹⁷⁾

奈良時代の園池は、平面では飛鳥時代とは大きく一線を画し、護岸手法では飛鳥時代の伝統的手法の片鱗を引き継ぎつつも大勢では新手法といえる州浜に変化する。この顕著な変化は、園池の根本的な築造手法の変化にはほかならず、そのことが奈良時代の園池の立地にも関係することになる。(中略) 総じていえば、飛鳥時代の庭園は、明瞭に人工的であるのに対し、奈良時代の庭園は自然風景的要素がきわだつて強くなっており、立地についても自然順応的な傾向が見られるのである。飛鳥時代と奈良時代の庭園デザインの間には大転換があるといつてよいだろう。

これらの議論を踏まえ、本稿では古代の庭園一般を扱うのではなく、文献上では「苑」と表記される事例に限定し、考古学的には飛鳥時代の支配者の庭園を考察の対象とした。

支配者の庭園としての「苑」は、中国商時代にすでに都城の主要な構成要素であったが、唐代にいたつて様式上の完成をみたとされている。七、八世紀の新羅や渤海、大和の苑池もその影響を受けており、近年、韓国慶州の雁鴨池や龍江洞苑池と日本の奈良県にある古代苑池との考古学的な比較研究もされている。¹⁸⁾

一方、日本最古の正史とされる『日本書紀』(七二〇年成立)における「苑」の築造記事の初出は、武烈天皇代である。

及此時、穿池起苑、以盛禽獸。而好田獵、走狗試馬。出入不時。不避大風・甚雨。衣温而忘百姓之寒、食美而忘天下之飢。大進侏儒・倡優、為爛漫之樂、設奇偉之戲、縱靡靡之聲、日夜常与宮人沈湎于酒、以錦繡為席。衣以綾紉者衆。

「此の時に及びて、池を穿り苑を起りて、禽獸を盛す。而して田獵を好み、狗を走せ馬を試べたまふ。出入ること時ならず。大風・甚雨を避らず。衣温かにして、百姓の寒ゆることを忘れ、美食して、天下の飢うることを忘れたまふ。大きに侏儒・倡優を進め、爛漫の樂を為し、奇偉の戲を設け、靡々の声を

縦にし、日夜に常に宮人と酒に沈湎し、錦繡を以ちて席としたまふ。衣、綾紉を以ちてする者衆し。」

（『日本書紀』 卷第十六 武烈天皇八年三月）

この記述は文飾等もあり事実とは考えられていないが、池を掘り「苑」を造つたと記されており、「苑」には池が不可欠であつたことがわかる。また、そこには禽獸が放たれてゐたともあり、まさに『説文解字』に載る「苑」であるといえる。さらにここでは、狩りを楽しみ歌舞音曲を奏させて飲食に明け暮れたと続き、武烈天皇が民衆を顧みない様子が描かれてゐることが留意される。この記事の直前には、次のような武烈天皇の行状も記されている。

八年春三月、使女裸形、坐平板上、牽馬就前遊牝。觀女不淨、沾湿者殺。不湿者没為奴婢、以此為樂。

「八年の春三月に、女を裸形にして、平板の上に坐ゑ、馬を牽きて前に就して遊牝せしむ。女の不淨を觀るときに、沾湿へる者は殺し、湿はざる者は没めて奴婢とし、此を以ちて樂としたまふ。」

（『日本書紀』 卷第十六 武烈天皇八年三月）

こつした暴虐を尽くす表現は、『古列女伝』等に典拠を持つ

ことが指摘されており、暴君の代名詞であつた夏の傑王や殷の紂王の記事を踏まえて描かれたとみられている。武烈天皇は後継のないまま同年十二月に崩御したといい、晩年の猟奇性を帯びた行状を描く一環として、「苑」の築造記事も位置付けられてゐることになるだろう。没年齢も書物によつて大幅に異なることや、次の継体天皇との系譜的な断絶からみても、中国の史書に倣つて潤色された記述として理解される。王宮は泊瀬列城にあつたとされるが、比定地である桜井市大字出雲周辺に中国なみの広大な「苑」が築造されていたとみるのも現実的ではない。当該例が日本庭園史の中に位置付けられていない所以であらう。

これ以前の『日本書紀』の記事としては、忍坂大中姫が允恭天皇の皇后となる以前に「苑」に遊ぶ様子がみえる。

初皇后随母在家、独遊苑中。時鬪鷄国造從傍徑行之。乘馬而莅籬、謂皇后、嘲之曰、能作園乎、汝者也。

「初め皇后、母に随ひて家に在し、独り苑中に遊ぶたまふ。時に鬪鷄国造、傍の徑より行く。馬に乗りにて籬に莅み、皇后に謂りて、嘲りて曰く、「能く園を作るか、汝や」といふ。」

(『日本書紀』 卷第十三 允恭天皇二年二月条)

「苑」と「園」が同一視されていたとするには、問題が残るように思われる例である。また皇后となる前、母親の家にいた時であるということから、王宮の「苑」ではないものの、文章の主語は未来に引き寄せた「皇后」であり、それに相応しい場として「苑」と表記された可能性は捨てきれない。鬮鶏国造が、敬意のまつたくない呼びかけである「汝」を用いて忍坂大中姫を嘲る際に、あえて「園」と記している点も注目される。その後、植えられていた蘭をめぐる鬮鶏国造の無礼が描かれ、「苑」にも「園」にも様々な植物が植えられているとの認識があり、通用することにもなつたかとは考えられる。

また、顕宗天皇元年の三月上巳に「後苑」に行幸し「曲水宴」が催されたこと(『日本書紀』 卷第十五 顕宗天皇元年三月条)もみえる。「曲水宴」の初出記事ではあるが、顕宗天皇の近飛鳥八鈞宮の所在地は不明であり、考古学的な裏付けはない。同二年三月、同三年三月にも立て続けに「曲水宴」が記され、以後は久しく登場しないことから、奈良時代の実態から遡及して書かれた記事と考えられている。

ただ、近年の発掘調査によつて『日本書紀』の記述内容に相当する遺構が考古学的に確認された例も皆無ではない。たとえば、斉明天皇(在位六五五―六六一)の時代に「狂心渠」と記された大規模な土木工事を伴う水路や、それを使って運ばれた砂岩による「周垣」が明日香村飛鳥から出土し、単なる文飾とみられていた表現が当時の実際の状況を描写していたらしいことが明らかになった。飛鳥京跡苑池もそのひとつである。

三 東アジアの中の飛鳥京苑池

飛鳥京跡苑池遺構に該当すると目されている記述は、次のような簡素なものである。

戊申、幸白錦後苑。

「戊申に、白錦後苑に幸す。」

(『日本書紀』 卷第二十九 天武天皇十四年十一月)

丙子、天皇觀公私馬於御苑。

「丙子に、天皇、公私の馬を御苑に觀す。」

(『日本書紀』 卷第三十 持統天皇五年三月)

「白錦後苑」「御苑」という記述は、従来、武烈紀の例と同様に中国の史書に倣った記述とみられていたが、実際に飛鳥宮跡の北西部、明日香川の東岸に、斉明天皇の時代から造営されていた「苑」に相当する遺構が検出されたことで、飛鳥時代にも「苑」を伴う「京」が整備されていた可能性が高まった。史書に明瞭には書かれてはいないにせよ、実際には存在していた飛鳥時代の「苑」の事例として、貴重な示唆を与えてくれる。

「幸す」とあることから、飛鳥浄御原宮に隣接した苑池が「白錦後苑」であるか疑問も呈されたが、河岸段丘の上にある宮と苑池との間には約十メートルにも及ぶ高低差があり、二〇一五年には宮の内郭と苑池を隔てる門の跡も検出されたことから、「幸す」と記述される必然性があつた可能性も考えられる。

飛鳥京苑池は、扇形を変形させたような南池と、直線を中心とした不整形の北池とから成り、両者は水路でつながっていた。その不思議な形は、古代東アジアにおける苑池の中でもほかに類例をみない。南池の中には不定形の島が造られており、それを囲むように規則性をもつて並んだ穴が検出され

ている。池に張り出したテラス状の構造物があつたとも指摘され、極めて特異なデザインであるとい¹¹⁾。

また、ハス・オニバス・アカマツ（またはクロマツ）・ゴウマツ類・センダン・モモ・ウメ・ナシ・カキ・スモモ・オニグルミ・ヒメグルミ・ナツメが栽培されていた痕跡が確認されており、同時に禽獣を飼う「園」であつた可能性も指摘されている¹²⁾。

さらに、土器類は杯や椀、皿などの供膳具が主体で、甕や壺といった貯蔵具や煮沸具が少ないことから、鑑賞や逍遙、遊宴の場であつたと解されている¹⁴⁾。琴柱や小型の人面のような木製品など、芸能に関するとみられる遺物も出土しており、先掲の武烈紀にみえた歌舞音曲を奏させて飲食に明け暮れたとい¹³⁾記述を彷彿させる。

『三國史記』にもほぼ同時期に次のような記述があることが知られる¹⁵⁾。

宮内穿池造山。種花草。養珍禽奇獸。

『三國史記』卷第六新羅本紀第七文武王（下）

文武王十四（六七四）年二月

宮内に池を穿つて山を造り、花や草を植え、珍しい禽や獸

を飼ったとあり、武烈紀の記事と共通する「苑」の概念を窺うことができる。武烈紀が実態を伴っていないとみられるのに対して、この文武王の「池」は、一般的に一九七五年に発掘された韓国慶州月城の雁鴨池に比定されている。ただし、当該記事の示す六七四年頃は新羅が三国統一した直後であり、半島には唐の駐留軍がいて交戦状態が続いていたと考えられることから、実際には大規模な工事は行われていなかったとの指摘もある。

もう一つしばしば比較される記事に、次のようなものがある。

穿池於宮南。引水二十餘里。四岸植以楊柳。水中築島嶼。
擬方丈仙山。

（『三国史記』卷第二十七百濟本紀第五

武王三十五年三月）

宮の南に「池」を穿り、水を引き、四方の岸に楊柳を植え、池水の中に島を築いて、方丈仙山を模したという。『日本書紀』推古天皇二十年是年条には、これに通じる作庭技術が伝来したという記事が載る。

是歳、自百済国、有化来者、其面・身皆斑白。若有白

癩者乎。惡其異於人、欲棄海中嶋。然其人曰、若惡臣之斑皮者、白斑牛馬不可畜於國中。亦臣有小才。能構山岳之形。其留臣而用、則為国有利。何空之棄海嶋耶。於是聽其辞以不棄。仍令構須弥山形及吳橋於南庭。時人号其

人曰路子工。亦名芝耆摩呂。

「是の歳に、百済国より化来ける者有り。其の面・身、皆斑白なり。若しくは白癩有る者か。其の、人に異なることを悪みて、海中の島に棄てむとす。然るに其の人の曰く、「若し臣の斑皮を惡みたまはば、白斑なる牛馬は、國中に畜ふべからず。亦臣、小なる才有り。能く山岳の形を構く。其れ臣を留めて用ゐたまはば、國の為に利有らむ。何ぞ空しく海の島に棄つるや」といふ。是に其の辞を聴きて棄てず。仍りて須弥山の形と吳橋を南庭に構かしむ。時人、其の人を号けて路子工と曰ふ。亦の名は芝耆摩呂。」

（『日本書紀』卷第三十 推古天皇二十年是歳条）

百済国からやって来た人物が作庭技術を伝え、「須弥山」と「吳橋」とを「南庭」に設けたとある。当該記事に該当する遺構として、一般に明日香村の石神遺跡が比定されている

が、ここでいう「須弥山」については、道教の「崑崙山」との混同があるとの指摘がある一方で『俱舍論』にあるように仏教の理念に基づく作庭であったという反論もあり、推古天皇の宮と「南庭」との位置関係を含め、確定するまでには至っていないようである。

中国の「苑」を規範としながらも、韓国や日本においてそれぞれに様式が変容していくことが考古学的に確認されているが、中でも日本的な変容として特徴的なのが、池の水深が極めて浅いということと、州浜を多用することであると指摘されている。¹⁸⁾

日中韓において、史書に記された記述にはそれほど相違点はないように思われるが、考古学によって明らかにされた実体としての「苑」は異なっているということができよう。

四 飛鳥時代の詩歌表現としての「苑」

そうした実態と史書の記述との相違を踏まえた上で、『懷風藻』や『万葉集』の「苑」の描写をみておきたい。

『文選』等においては、概ね宮廷の描写として理解できる

とはいえ神仙境を描くような誇張表現もあり、現存する日本最古の漢詩集『懷風藻』は、そうした『文選』等の影響下にあるといえる。古代東アジアの苑池が、原則として道教的な思想背景を持っていたとされていることも相通じる。

ただ、いくつかの詩には、飛鳥京苑池のありようが反映されていた可能性もあるのではないだろうか。

『懷風藻』には、宴席での応詔詩が多数収載されており、『苑』の用例に限定しても九例（四、一〇、二八、三八、四〇、四九、六一、七〇、一一七）ある。たとえば、飛鳥京苑池という大和風に変容した「苑」を実際に見聞きしていた世代と考えられる大津皇子（六六三了六八六年）は、「春苑宴」と題する五言詩を残している。

五言 春苑の宴 一首

衿えびを開いて靈沼れいしうに臨み、目めを遊あそばせて金苑きんえんを歩む。澄てつ徹てつして苔水たいすい深く、唼あひ嚙あひとして霞か牽けん遠とほし。驚波おどなみは絃せんと共に響ひびき、啁鳥しうとは風かぜと与よに聞きく。群公ぐんこう倒載たうざいして帰かえり、彭沢ほうたくの宴うたげ誰たれか論ろんぜん。

五言 春苑宴 一首

開衿臨靈沼 遊目歩金苑 澄徹苔水深 唼嚙霞峰遠。

驚波共絃響。 哢鳥与風聞。 群公倒載帰。 彭沢宴誰論。

〔懷風藻〕詩番四⁽¹⁾

春の「苑」を散歩し、苔の生えた池水や霞がかつた峰を眺めながら、琴の音と共に聞こえてくる波や風の音、鳥の声を賞美しつつ酔いしれて倒れ伏す参加者たちの様子が描かれ、陶淵明が彭沢で催した宴を引き合いに出して、この春苑の宴がそれ以上の宴であるとたたえている。「春苑」という詩題自体も中国詩に倣ったものだが、故事を踏まえた表現から中国文学の造詣の深さが伺える。宴席のすばらしさを描くのが主眼であり、典拠表現も多用されていることから、実景を表現したとはいえず、文学上の観念的表現であったといえるべきかもしれない。もとより仮託説もある詩であり、⁽²⁾実際にどのような場所でのような宴席があったのかを文学表現から復元することは適切とはいえない。しかしながら、大津皇子にしても、生没年からみて飛鳥京苑池を実際に目にしたことがあったとも考えられ、それが東アジアにおいて特異なデザインを持つ池とはいえ、池の中には水生植物の痕跡があり、琴柱等も出土しており、史書において珍禽奇獣を放すと記されていたように、植栽された木々には鳥たちがとまり轉つても

いたことだろう。そうした実体験が表現にまつたく影響を与えないということも考えにくいのではないか。「彭沢の宴誰か論ぜん」という表現には、眼前に繰り広げられる情景を詠む臨場感が感じられるようにも思われる。

大津皇子の詩と同じ「春苑」の題を持つ田辺史百枝（生没年不詳）の「春苑応詔」詩では、次のように描写されている。田辺史百枝は、七〇〇年の律令選定に参加したことが知られる人物である。

五言 春苑 詔に必ず。一首。

聖情汎愛敦く、神功も亦埒り難し。唐鳳台下に翔り、
周魚水浜に躍る。松風の韻は詠を添へ、梅花の薫は身
に帯ぶ。琴酒は芳苑に開き、丹墨は英人に点ず。適
上林の会に遭い、忝なくも寿く万年の春。

五言。春苑応詔。一首。

聖情汎愛。神功亦難埒。唐鳳翔台下。周魚躍水浜。

松風韻添詠。梅花薫帶身。琴酒開芳苑。丹墨点英人。

適遇上林会。忝寿万年春。〔懷風藻〕詩番三八

〔春苑〕の宴を漢の武帝の上林会になぞらえて賞賛し、天皇

を讚美した内容である。「丹墨は英人に点ず」と、文人達の詩作がなされていたことも表現されており、すべてが天皇讚美の型どおりであったとしても、詔に应じて「春苑」を詠んだとあることから、それが飛鳥京苑池における詩宴であった蓋然性は高い。「松風」と「梅花」の対句により目出度い景が描かれており、ことに「梅花」について、従来は『万葉集』巻五に載る天平二年（七三〇）の梅花宴歌群に先行する觀念的な表現として理解されてきたが、先述のとおり飛鳥京苑池でウメが栽培されていたことが確認されている。マツ類も同様であり、詩中の琴・酒が理念上の表現であるとしても、実際に琴柱や酒器が出土していることを踏まえると、まったくの想像上の景とは言い切れないように思われる。

詩番三八にも詠まれていた「上林」とは漢武帝の「上林苑」であり、次のようにも詠まれている。

五言 春日詔に应ず。一首。（第二首）

姑射に太寶遁れ、嵯巖に神仙を索す。豈若し聴覽の隙に、仁智は山川に寓す。神衿春色を弄し、清蹕林泉を歴る。登りて望む繡翼の径、降りて臨む錦鱗の淵。糸竹時に盤桓として、文酒乍に留連す。薰風琴台に入り、

莫日歌筵を照らす。岫室明鏡開き、松殿翠烟浮かぶ。幸に陪瀛洲の趣、誰か論ぜん上林の篇。

五言 春日詔。二首。（第二首）

姑射遁太寶。嵯巖索神仙。豈若聴覽隙。仁智寓山川。
神衿弄春色。清蹕歷林泉。登望繡翼径。降臨錦鱗淵。
絲竹時盤桓。文酒乍留連。薰風入琴台。莫日照歌筵。
岫室開明鏡。松殿浮翠烟。幸陪瀛洲趣。誰論上林篇。

（『懷風藻』詩番二〇）

大津皇子事件に連座した巨瀬朝臣多益須（六六三丁七一〇年）の応詔詩である。中国においては神仙として隱遁している賢人を求めるが、大和では聖帝である天皇が政務の合間に行幸される地が瀛洲の趣がある仙境であり、仙人を探し求める必要はないとたたえている。周囲の春の光景が仙境のようであると表現して、上林苑の春の宴を言う必要はないと結ぶ点は、先掲の大津皇子詩が「彭沢の宴誰か論ぜん」と結んでいたことに似る。詩宴を通じて君臣和楽を実現する天皇讚美の常套表現ではあるが、武烈紀のように単なる文飾ではなく、当時の「苑」での実体験を踏まえた文学上の表現であった可能性が考えられる。

辰巳正明氏によれば、葛野王（六六九〜七〇五年）による「春日翫鶯梅」（『懷風藻』詩番一〇）は、「梅」と「鶯」との取り合わせは楽府詩にみられるものの、詩題として「鶯梅」の例が見出せないことが指摘されている。²¹飛鳥京苑池が、中国の苑池の影響下にありながらも日本的な変容を遂げていたように、文学表現においても日本独自の変容があつたといえるだろう。

一方、和歌集である『万葉集』の「苑」字の用例を抽出してみると、序文や題詞に六例、左注に一例、歌中に十一例を見出すことができる。ただし、左注の一例は「苑臣」という姓であり（巻六・一〇二七）、苑池を描く例ではない。文筆を意味する「翰苑」の二例（巻五・八一五、巻十七・三九六七）も同様である。序文や題詞は漢文体であるが、「上林」の語はなく、山上憶良の「沈痾自哀文」（巻五・八九七前）に「西苑」とあるのが、洛陽の西にある後漢順帝の「苑」を指すとされている。²²

大伴旅人による梅花宴での「梅苑」（巻五・八六四）や「春苑梅歌」（巻十九・四一七四）は、「苑」の字を用いているものの、大宰府の梅花を詠んでおり、王宮のそれでないこ

とは明らかである。残る二例の「春苑」（巻十七・三九六五、巻十九・四一三九）は、ともに『文選』「上林賦」等を踏まえたつ、「懷風藻」にも見られたような景を表出している。

いずれも奈良時代の作品であり、まさに「上林苑」を模した「松林苑」が平城京の北辺に実際に広がっていた時代の例とみられるものの、その「松林苑」に関わる万葉歌はみられず、より観念的に用いられていることは興味深い。

「御苑（三苑）」のカラア斗（韓藍）を詠む例（『万葉集』巻十・二二七八、巻十一・二七八四）は、人口に膾炙した恋歌を収集した巻に収載されているが、外国一般を指した「韓」の、染料を意味する「藍」という名の示すとおり、本来は王宮の「苑」にしかなかった珍奇な植物であつたとも考えられる。

ただ、万葉歌の場合、むしろ私邸の庭を指す例の方が多いとみられる。たとえば、大伴家持の「吾宅乃苑」（巻八・一四四一）、大伴書持の「御苑布能 百木乃宇梅」（巻十七・三九〇六）などが散見され、本来の支配者の庭園としての「苑」の意味を離れ、奈良時代の貴族の邸宅の庭という程度に用いられていたと考えられる。それらの表現をみると、「苑」の

光景として、「梅」と「鶯」との取り合わせや「雪」との取り合わせなどが詠まれており、中国文学の影響が見て取れるが、「苑」の概念と表現とを受容した上で咀嚼し、和歌として再構築したと考えられる。

その最たる例が、次の大伴家持の作歌である。⁽²³⁾

天平勝宝二年三月一日の暮に、春の苑の桃李の花
を眺めて作れる一首

春の苑 紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ少女

天平勝寶二年三月一日之暮眺春苑桃李花作

一首

春苑 紅尔保布 桃花 下照道尔 出立媿媿

(卷十九・四一三九)

わが園の李の花か庭に降るはだれのいまだ残りたるかも

吾園之 李花可 庭尔落 波太礼能末 遣在可母

(卷十九・四一四〇)

「春苑」の「桃李花」を属目して詠んだという歌であり、四一三九番歌は樹下美人図を彷彿させ、ことに観念的な歌とみられている。四一四〇番歌には「吾園」ともあり、「苑」と重ならないように用字を変えたかといわれる。これらは春

の苑の景を、支配者の「苑」の情景描写や天皇讚美としてではなく、中国文学を和化する試みとして、純粋に文学的な営為として表現されたと考えられ、ここに実体としての「苑」の投影を見ることは無意味であるだろう。

『万葉集』には、奈良時代において松林苑を詠む歌が無いように、飛鳥時代にも王宮の「苑」を詠んだ歌が無いものと考えられる。先述のとおり、嶋宮については庭園史においても文学表現においても別個に論じるべきと考えるところから、別稿を期したい。

五 おわりに

従来は、『懐風藻』や『万葉集』の詩歌表現において「苑」と「園」「庭」「嶋」「池」等が同時に扱われ論じられてきた。それは飛鳥時代に中国式の「苑」の実体がなく、観念上の景として詩歌表現のみを享受したとみられていたことに拠るところが大きいように思われる。近年の考古学の成果を踏まえると、飛鳥時代と奈良時代との庭園には大きな相違点があり、飛鳥時代にもすでに支配者の「苑」が実際に存在して

いたといえ、そうした状況のもとで中国文学を享受しつつ日本の詩歌表現が練られていったと考えられる。飛鳥京苑池が中国式の苑池そのままではなく日本式に変容させた形であったように、文学上の表現についても、実際の景観に基づき変容した可能性を考えてみた次第である。

佐藤先生のご指導の御陰で不肖未熟の身がこつしていられることに感謝しつつ、力不足ではあるが、隣接諸分野の成果を援用して従来説を再考する試みが万葉古代学の構築には不可欠であると考えて、今後も模索を続けたい。

注

- (1) 岸俊男「万葉集と遺跡 嶋を事例として」『国文学』二二三号、學燈社(一九七八年)／斎藤充博「万葉集における庭園と文学」『藝文研究』五七号、慶應義塾大学(一九九〇年)／小谷博泰「万葉集と庭園 イメージモデルとしての古代苑池」『日本文学』五一 五号(二〇〇三年五月)／等古学研究所(一九九九年)
- (2) 河上邦彦「飛鳥の苑池」『発掘された飛鳥の苑池』檀原考古学研究所(一九九九年)
- (3) 武田比呂男「古代における庭園 その機能と表現をめぐって」『日本文学』五一 五号(二〇〇三年五月)
- (4) 相原嘉之「飛鳥の古代庭園 苑池空間の構造と性格」『古代庭園の思想 神仙世界への憧憬』角川書店(二〇〇二年)
- (5) 金子裕之「宮廷と苑池」『古代庭園の思想 神仙世界への憧憬』角川書店(二〇〇二年)
- (6) 本中真「日本の庭園の歩み 祭祀から庭園へ」『しにか』一一 四号(二〇〇〇年四月)
- (7) 小野健吉「飛鳥・奈良時代の庭園遺構と東院庭園」『日本庭園の歴史と文化』吉川弘文館(二〇一五年)
- (8) 高橋知奈津「東アジアの都城と苑」奈良文化財研究所創立六十周年記念平成二十四年度飛鳥資料館秋期特別展図録『花開く都城文化』奈良文化財研究所飛鳥資料館(二〇二二年)
- (9) 『日本書紀』の本文および書き下し文は原則として、小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注『新編日本古典文学全集3 日本書紀』小学館(一九九六年)に拠る。
- (10) 「近飛鳥」は大府羽曳野市飛鳥だが「八釣」の地名はななく、「遠飛鳥」である奈良県高市郡明日香村の大字八釣かともいう。記は「近飛鳥宮」とする。
- (11) 奈良県立檀原考古学研究所調査報告第一一一冊『史跡・名勝 飛鳥京跡苑池(1) 飛鳥京跡』奈良県立檀原考古学研究所(二〇二二年)
- (12) 注11に同じ。
- (13) 小野健吉「飛鳥京跡苑池遺構のなかの動物園」『奈文研紀要』奈良文化財研究所(二〇〇三年)
- (14) 注11に同じ。

- (15) 朝鮮史学会編・末松保和校訂『三國史記(全)』(国書刊行会(一九七一年))
- (16) 尹武炳「韓国の古代苑池」『発掘された古代の苑池』(学生社(一九九〇年))
- (17) 寺川眞知夫「中国モデルの庭園の受容と基盤」『日本文学』五一―五号(二〇〇三年五月)
- (18) 吉田恵二「日本古代庭園遺跡と曲水宴」『國學院雑誌』一〇〇―一―号(一九九九年)
- (19) 『懷風藻』は原則として、辰巳正明『懷風藻全注釈』(笠間書院(二〇二二年))に拠る。
- (20) 加藤有子「大津皇子「春苑宴」考」『大東文化大学日本文学研究』四〇号(二〇〇一年)他
- (21) 辰巳正明『懷風藻全注釈』(笠間書院(二〇二二年))
- (22) 中西進『万葉集 全訳注原文付』(講談社(一九七八年))
- (23) 『万葉集』の原文および書き下し文は原則として、中西進『万葉集 全訳注原文付』(講談社(一九七八年))に拠る。

(奈良県立万葉文化館 指導研究員)